

市内遺跡発掘調査等事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

松倉城墨群発掘調査報告Ⅱ

—富山県魚津市鹿熊地内試掘・地形測量調査報告—

2003

魚津市教育委員会

序

ここ富山県魚津市は、山・川・海に囲まれた、風光明媚な土地柄であります。その大地には、先史から人々の連綿とした生活の足跡をたどることができます。その中に、富山県の中世戦国史に欠かすことのできない遺跡として、松倉城跡があります。越中三大山城の1つとしてその規模は、県内に所在する数ある山城の中でも最大を誇るもので。室町～戦国時代には、幾多のつわものどもがこの城を巡って激しい攻防を繰り返していたことは、史料に散見されるところであります。松倉城跡は、本丸部分が県の史跡に指定され、二の丸跡などその他の地区においても埋蔵文化財包蔵地として登録し、その重要性の周知を図ると共に大切に保存されています。

松倉城跡の周辺には、多くの山城（支城）や砦跡が確認されており、松倉城を中心として、それを取り囲むような広域な城壁群を形成しています。その内で松倉城下の谷あいを流れる角川の流域には、城下町が広がっていたと考えられていますが、実態はほとんどわかっていません。

魚津市教育委員会では、平成13年度から5ヶ年にわたって松倉城壁群の範囲・実態確認を目的に、国・県の補助を受け、試掘・測量・分布調査を実施していくこととし、今年度は2年目にあたります。推定城下町内に所在する、鹿熊地内の鹿熊ホーエン遺跡を含む一帯の地形測量調査と試掘調査を行いました。既存の地形図では現せない土塁や曲輪状の平坦面など詳細な図面を作成できました。試掘調査では、主に中世期の遺物や堀跡と推定される遺構を確認できました。

調査対象地であります鹿熊地内では、林道・一般道工事などの開発事業も実施されていることから、本調査事業や報告書が、地域の歴史を解明する一助となるとともに、先人の残した貴重な遺跡を保護するための調整資料となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、多大な御協力を頂きました鹿熊地区の方々や関係機関、冬場の調査にあたった作業員の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成15年 3月

魚津市教育委員会

教育長 宮野 高司

例　　言

1. 本書は松倉城墨群範囲確認調査事業のうち、平成14年度に実施した推定城下町区域である、鹿熊地内における試掘調査及び地形測量調査の概要報告である。

2. 調査は国庫補助事業として、国庫補助金・富山県補助金を受けて、魚津市教育委員会が調査主体となり実施した。

3. 調査事務局は魚津市教育委員会社会教育課に置き、文化係が担当した。調査担当者は、市教育委員会社会教育課学芸員の塩田明弘が行った。発掘作業は社団法人魚津市シルバー人材センターに委託した。

4. 調査期間・対象地・面積は下記のとおりである。

地形測量期間 平成14年9月2日～10月16日

試掘調査期間 平成14年10月17日～平成14年12月18日

遺物整理期間 平成14年12月19日～平成15年3月31日

調査対象地 富山県魚津市鹿熊地内

調査面積 地形測量対象範囲：15,000m²、試掘調査：100m²

5. 発掘調査現場では、竹谷充生、小川卓哉（以上富山大学考古学研究室学生）の協力を得ている。また出土遺物の整理（洗浄・注記・実測・拓本作業）は竹谷充生、小川卓哉、細田隆博、岡田幸（同大学研究室学生）の協力を得ている。

6. 報告書作成にあたって、本書の執筆は塩田が担当した。遺構・遺物の実測、拓本、トレースは塩田、細田、岡田が行った。遺物の写真撮影は、栗山雅夫氏（福岡町教育委員会）に協力・助言を頂いた。

7. 本調査で設定した、基準杭は国土座標（世界測地系）を用い、水平基準は標高である。なお、図版中の方位は真北を示す。

8. 出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。

9. 調査において、下記の地権者の方々や鹿熊地区々長、地元住民の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

大崎武志、木下すみ子、谷山敦昭、谷山恵美子、浪岡直義、肥塚宗四郎、水尾秀俊 他

10. 調査期間中及び遺物整理期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。（敬称略）

菅沼幸春（地元城郭研究家）、高岡徹（富山県教育委員会）、

千田嘉博（国立歴史民俗博物館）、宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）

目 次

序

例 言

I. 調査に至る経緯	4
II. 遺跡の立地と環境	
1. 立地と地理的環境	4
2. 遺跡周辺の歴史的環境	6
3. 推定城下町の鹿熊地区について	6
4. 松倉城跡について	6
III. 調査の概要	
1. 調査の方法	8
2. 調査の成果	
(1) 地形測量調査	8
(2) 試掘調査	
①土壘内側（北側）平坦面	13
②土壘外側（南西側）平坦面	13
③土壘出入口と空堀状遺構	13
IV. 調査のまとめ	16
写真図版	20
報告書抄録	



I. 調査に至る経緯

松倉城跡に関する調査は、地元郷土史家や城郭研究者の方々によって精力的に行われており、詳細な綿張図や測量図、古い字名の記録などが作成されている。市教育委員会では、平成4年度から7年度にかけて、国庫補助事業として松倉城跡範囲確認調査を実施している。これは、松倉城跡の詳細な地形測量図と考古学的調査による遺構の範囲や年代を特定することを目的としたものである。試掘調査では、本丸と二の丸間の空堀の堆積状況や築造年代の推定、城山中腹にある平坦面（大見城平）の造成時期などが確認された〔麻柄・塩田1999〕。しかし広大な山城において、調査成果はその一端を示すものであり、更なる継続的な調査が期待されていた。

市教委では従来の調査・研究をもとに、松倉城単独ではなく、周辺に点在する山城・砦（支城）や城下町（居館・寺院・町屋）を含めた遺構の確認や遺存状況の把握、実態解明を目的に、平成13年度から平成17年度までの5ヶ月による、松倉城群範囲確認調査事業を行っている。

平成13年度には、推定城下町区域である鹿熊地内のポンヤシキ地区・ヒョウタン地区（淋光寺遺跡）、オヤシキ地区（鹿熊オヤシキ遺跡）、三枚田地区の各地区にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。各調査区において、室町～戦国時代の遺構・遺物を確認できた。特にオヤシキ、三枚田地区では礫石建物と推定される石列や溝、土坑などを検出し、従来の遺跡範囲よりさらに拡がる点や新たな遺跡（仮称・鹿熊三枚田遺跡）の発見などの知見を得た。出土遺物は、中世土師器皿を主体として他に国産・貿易陶磁器類などで、15世紀後半～16世紀代のものである。

当年度は、13年度同様鹿熊地内に所在する、鹿熊ホーエン遺跡とその周辺の地形測量と試掘調査を実施し、地形測量図の作成と遺構・遺物の範囲確認及び年代の特定につとめた。

II. 遺跡の立地と環境

1. 立地と地理的環境

魚津市は、富山県の東部中央から北東端部に位置する。市内には、滑川市との境をなす早月川、黒部市との境である布施川のほかに、毛勝山から流れる急流河川である片貝川や、角川が貫流する。魚津市の地形は、立山連峰剣岳から毛勝山、僧ヶ岳へと連なる山岳地帯とその前山を成す丘陵地帯、台地と平野部を構成する扇状地帯で構成される。市の平野部は僅かで、発達した洪積台地は河川によって形成された河岸段丘が顯著に見られる。

松倉城跡やその支城と考えられる水尾城跡や升方城跡など多数の山城や砦は、丘陵地上に立地し、この丘陵地は主に凝灰岩や泥岩などで構成される。松倉城跡の所在する城山の麓には城下町があつたとされる鹿熊地区が谷あいを流れる角川の流域及び丘陵地裾部に広がっている。現在この地区は、宅地と圃場整備の行われた整然とした水田、一部畑や杉林で占められる。鹿熊地内を貫流する角川は、早月川と片貝川の分水嶺付近に水源をもつ河川で、中流域には宮津など港の所在を想起させる地名が残る。このことは、松倉城跡やその周辺の調査などで中国製の磁器や多数の国産陶磁器が見つかっているが、その運搬に角川の水運を使用していたとも考えられる。日本海に流れ出る角川河口尻は活発な日本海交易の恩恵に預かっていたものと思われる。

平成14年度の試掘及び地形測量調査の対象地は、鹿熊ホーエン遺跡を含む約15,000m²の範囲である。当遺跡は第1、2図にあるように、松倉城跡がある城山（標高約430m）から北西へ派生した丘陵末端部に位置し、鹿熊集落を見下ろす高台にある。居館跡とも推定される鹿熊オヤシキ遺跡を南側から見下ろす位置にあることも本遺跡の性格を考える上で重要となる。現在も丘陵尾根を利用した土壁と



第1図 松倉城跡周辺図 (S = 1/10,000)

1. 松倉城跡 2. 小菅沼A城跡 3. 小菅沼神社（城館跡） 4. 小菅沼武家屋敷跡
5. 燐山砦 6. 鹿熊オヤシキ遺跡 7. 淳光寺遺跡 8. 底熊ホーエン遺跡 9. 升方城跡
10. 鹿熊城殿遺跡 11. 南升方遺跡 12. 石の門砦 13. 水尾城跡

その北側にある平坦面を確認できる。土壘及び平坦面付近の標高（海拔高）は約120～124mを測る。その平坦面は戦前まで水田として使われていたようだが、現在は杉林に姿を変えている。

2. 遺跡周辺の歴史的環境

松倉城跡周辺には多くの山城・砦跡の他に、城館や寺院、町屋で構成された城下町が存在していた。こうした松倉城を中心とした支城・城下町の、広域かつ有機的な繋がりを「松倉城星群」と位置づけている〔魚津市史編委1968〕。このため周知の遺跡は、中世から近世にかけての遺跡が集中し、古代以前は確認されていない。但し昭和53年に行われた圃場整備工事時の採取資料や過去の発掘調査の出土品に、古代の須恵器が確認されており、今後詳細な分布調査によって概期の遺跡が発見されるかもしれない。

松倉城跡の南西、角川を挟んだ早月川右岸の丘陵上には水尾城跡（市史跡）が位置する。水尾城跡よりさらに南東700m程の地点に水尾南城跡がある。水尾城跡から北西へ尾根づたいに700m程には南升方城跡、さらに北へ約1.5kmに升方城跡（市史跡）が位置する。水尾城跡と南升方城跡の中程には、城下への大手と推定される石組造構である石の門（市史跡）がその威容を誇っている。これらの遺跡は、富山市方面（県西側）に対する一連の防護線として松倉城の前線基地としての役目を担っていたものと推定できる。また角川右岸松倉城跡のある城山の麓を見ると、領主や家臣の屋敷跡と推定される、鹿熊オヤシキ遺跡や小菅沼武家屋敷跡（通称武隈屋敷跡・市史跡）などがある。また寺院跡と推定される淋光寺遺跡や堅固な土塁に囲まれた平坦面をもつ鹿熊ホーエン遺跡、松倉城跡の北側、鹿熊集落の入口にあたる箇所には焼山砦が形成されている。さらに図上に示すことが出来なかったが、松倉城跡から南東3～5kmの山中には金山跡が確認されており、多数の支城や砦、堅固な城郭の形成、城下町の繁栄には、この金山での資金力が関わっていたことは十分考えられる。

3. 推定城下町の鹿熊地区について

松倉城の城下町が広がっていたとされる鹿熊地区一帯には、昭和53年に大規模な圃場整備が実施されている。しかし事前の発掘調査が行われずに工事が施工されたため、遺跡の範囲や実態はほとんどわかっていない。工事中には、大量の中世土師器皿や国産陶磁器、中国製磁器、漆器、刀の锷などが採集された。大半の遺物採取地である通称オヤシキ地内（鹿熊オヤシキ遺跡）は、出土遺物や明治初期の地籍図、字名などから領主クラスの居館跡と推定されている。この他にも寺院や屋敷跡を想起させる字名が数多く見受けられ、現在でも耕作時に中世陶磁器が採集される水田もある。

4. 松倉城跡について

松倉城跡は魚津市の南西部、鹿熊字城山（標高約430m）に位置する。増山城跡（砺波市）・守山城跡（高岡市）とともに「越中の三大山城」としてその名を知られ、本丸部分（面積約3,600m²）は県の史跡に指定されている。城は南北に細長い尾根を空堀で区切り、複数の郭（曲輪）を連続して設けた連郭式山城である。南北約250mの長さに整然と並ぶ主要な5つの郭（本丸・二の丸、三の丸、四の丸）の周辺には多数の削平地や土壘、空堀などが確認できる。特に本丸から城山中腹の大見城平に至るまで、館跡と見られる平坦面や土壘、砦状の造構が数多く見られる。南端の本丸は標高418m、北端ののろし台は標高430mを測り、本丸からののろし台までの距離は約800m、大見城平を含めると150,000m²近い、県最大の巨大な城郭である。城の三方（東南西）は急斜面の絶壁で、その周囲は升方城・水尾城・水尾南城・北山城（金山城）・坪野城など多くの支城に囲まれた、まさに天然の要害であった。築城の時期は明らかではないが、南北朝期の14世紀前半には越中における主要な山城として史料に散見することから鎌倉時代の築城が推定される。15世紀には越中守護である畠山氏の守護代と



第2図 試掘調査対象地区と周辺遺跡範囲 ($S = 1/2,500$)

(スクリートーンによる網掛け部分)

1. 鹿熊ホーエン遺跡 2. 淋光寺遺跡 3. 鹿熊オヤシキ遺跡

して、椎名氏が新川地区（富山県東部）を治めることとなり、代々椎名氏が城主をつとめた。椎名氏は越後の長尾（上杉）氏に属し、新川地区での勢力を強めていくが、永禄11（1568）年、越後上杉氏からの自立を図り、椎名康胤は武田信玄と結んだことから上杉謙信に攻められ、翌年落城。以後魚津城とともに上杉方の越中における拠点として、重臣の河田長親を置き新川郡の統治にあたる。その後次第に政治・軍事の拠点が魚津城に移ることとなり、天正11（1583）年、織田方の佐々成政の攻撃により、魚津城とともに落城する。成政転封後は前田氏の所領となつたが、慶長年間の初め（16世紀末頃）に至り廃城になったといわれている。

このように松倉城跡は新川地区における政治・経済・軍事の拠点として、この城を巡る攻防が、魚津の中世史を語る上で重要な位置を占めている。

III. 調査の概要

1. 調査の方法

調査地の選定にあたっては、（1）圃場整備による掘削の影響が少ないと思われる地点、（2）現地やその近隣で中世期の遺物が採集された地点、（3）字名や通称名によって何らかの遺跡が想定される地点、（4）城郭研究者や地元鹿熊地区の方々の意見を基に、地権者の同意が得られた地点、を勘案して調査対象の候補地としている。前年度の平成13年度には、鹿熊オヤシキ遺跡及び淋光寺遺跡を含む4地区17箇所にトレント（約260m²）を設定した〔魚津市教委2002〕。調査では室町～戦国期の遺構・遺物が検出できたが、鹿熊ホーエン遺跡周辺も当初調査予定箇所であったのだが、調査期間等の関係から次年度へ持ち越しとなった。

調査を行う際、鹿熊ホーエン遺跡内にて現在も残る土壘や平坦面を中心に、土壘外側（南西側）に連続して連なる階段状の平坦面にも注目した。試掘調査を行う前に、遺構の現況を把握するために、当遺跡を含む付近一帯の地形測量調査を9月から10月にかけて実施した。現地測量終了後、調査箇所を検討し、発掘調査開始前に国土座標及び標高を落とした基準杭を10m間隔により21本設置した（第3図参照）。試掘調査箇所は、その基準杭を利用して、幅1m、長さ5～10mのトレントを土壘内側（北側）の平坦面に7箇所、外側の階段状平坦面に4箇所、土壘出入り口付近6箇所の、計17箇所（約100m²）設定した。発掘調査作業は、人力による掘削で、表土を除去し、層位を確認しながら基本的に中世遺物包含層上面もしくは、遺構表面まで下げ、場合によって地山上面まで掘り下げた。掘削作業の終了したトレントから土壘堆積層図・遺構平面図を作成し、記録につとめた。出土遺物はトータルステーションを用いて出土地点・海拔高を記録し、層位ごとに取り上げた。

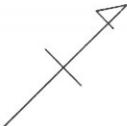
調査終了後に埋め戻しを行い、12月18日に現地調査を終了した。

2. 調査の成果

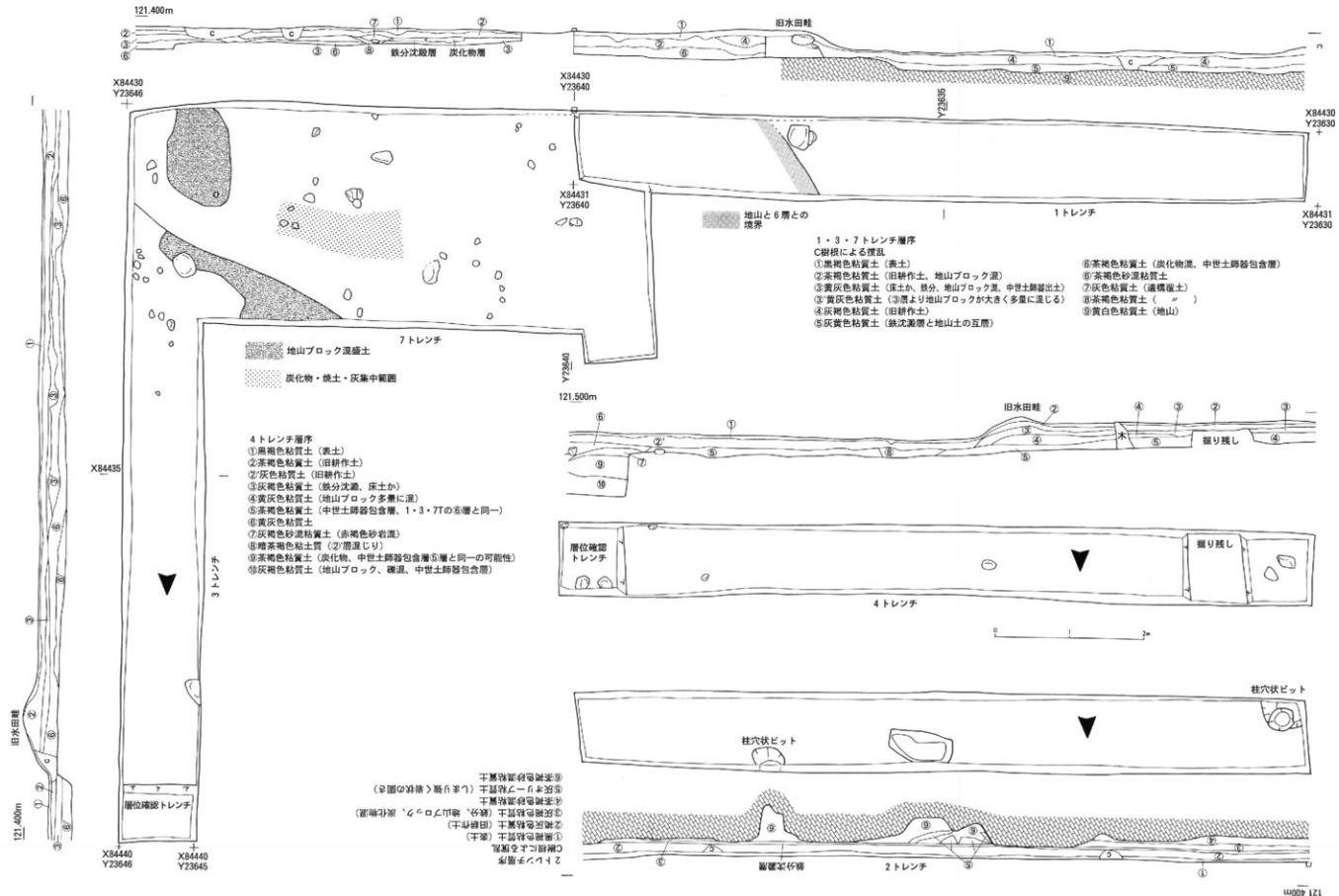
（1）地形測量調査（第3図）

地形測量は業者委託により、縮尺100分の1（主曲線25cm）と200分の1（主曲線50cm）による測量図を作成した。等高線とは別に、現況地形の上場と下場、通路を書き加えている。さらに報告書・検討作業用に200分の1の図面を利用し、500分の1と1,000分の1の測量図を追加作成した。第3図の中央を見ると、丘陵尾根を利用した土壘とその内側（北側）平坦面を含む鹿熊ホーエン遺跡と、土壘外側（南西側）に、階段状に連なる平坦面が確認できる。図中には、今年度（1～17T）と13年度に実施した三枚田地区の試掘調査箇所を付記した。現在、土壘上及びその側面と、南端の谷部に接した丘陵頂部に近現代の墓や蔵骨器が認められる。昭和初期まで、さらに存在していたようだが、現地

0 25 50m



第3図 鹿熊ホーエン遺跡周辺地形測量図 (S=1/500)



第4図 1~4 トレンチ断面図・平面図 ($S=1/50$)

に至るまでには勾配がきついこともあり、麓の集落近隣に移転させたようである。

(2) 試掘調査

①土壘内側（北側）平坦面 【1～7T】（第4、10、11図）

層位 基本土層として、表土（黒褐色粘質土）・旧耕作土（茶褐色粘質土）・床土と思われる黄灰色粘質土層の下に、中世の遺物包含層である茶褐色粘質土層が確認できた。なお1、2トレンチ（以下「T」）は他の調査箇所より15cm程低まった場所であり、削平によるためか包含層は存在しない。4Tでは、部分的に深堀を行った地点において、表土下50～80cmの深さを測る⑨、⑩層で15世紀後半～16世紀初頭に位置づけられる土師器皿が出土した。平坦面造成及び土壘築造はこの時期に行ったものと思われる。5、6Tにおいて部分的に深掘りを行ったが、中世の遺物は出土せず、包含層や遺構は確認されなかった。堆積土は、水が湧きやすく、水性堆積を示す灰色粘質土層である。

遺構 2Tの中央付近と西端において、柱穴状ピットを2基確認したが、遺物の出土は無い。径40cm、深さ60cmを測る円形と径40cm、深さ40cmの不整円形を呈するものである。3・7Tでは、遺物包含層である⑥層を若干掘り下げると、15cm程の礫が多数検出された。礫の中には径30cm程の平坦な河原石も見受けられたが、規則性が無く、礎石とは判断できない。

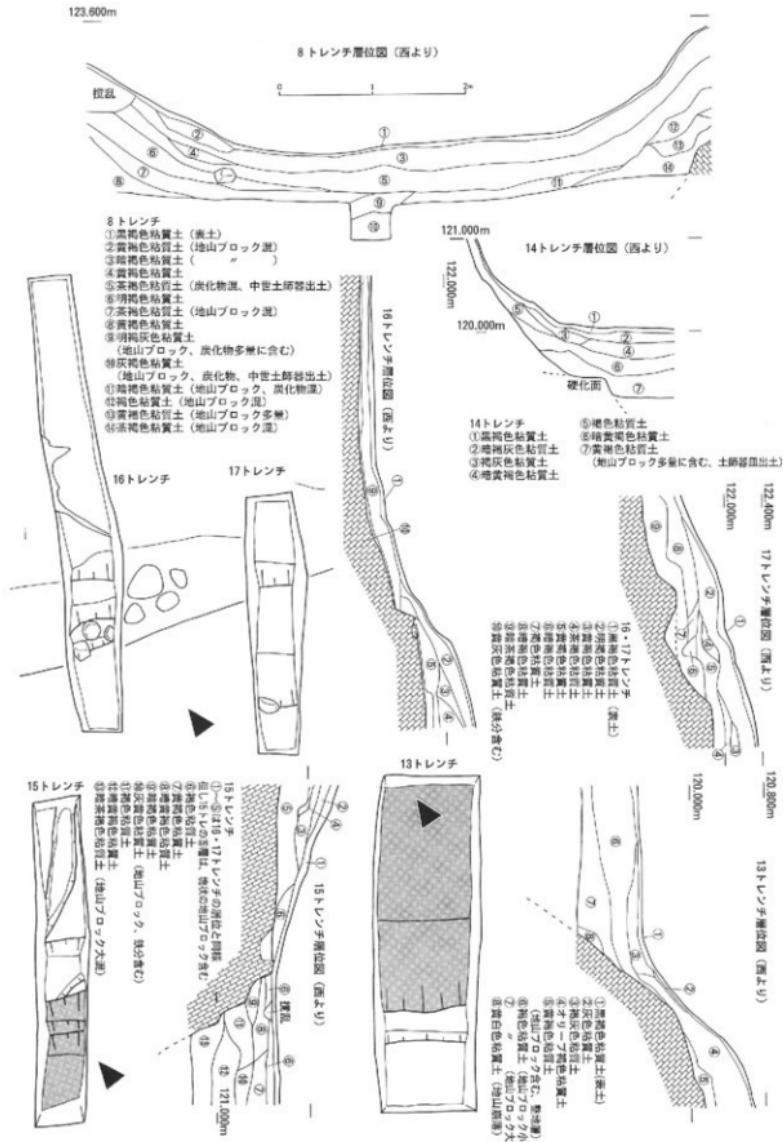
遺物 1～4、7Tにて中世土師器皿が出土したが、すべて包含層からで一括性はない。所産時期は15世紀後半～16世紀代に収まるものである。口縁部に強いナデ調整を1段施し外反させた、15世紀後半～16世紀初頭に位置づけられる土師器皿が主体を成す。同様の器形は、舟橋村仏生寺城跡の調査においてもまとめて出土している〔舟橋村教委2001〕。遺物は3、7、4Tから集中して出土し、16世紀前半のもの（49～51）や後半のもの（6、18～20）もある。土師器の他に、4Tから珠洲の壺片（30）、5Tでは17～18世紀代の越中瀬戸の碗（31）、7Tより14世紀代の青磁碗（34）が出土した。図版にはないが、3Tから珠洲の破片1点、7Tより越前窯片1点が見つかっている。内側平坦面調査と同時に、土壘出入口と側面部分の清掃をかねて表土掘削を行った。出入り口（2）から西へ2.5mの土壘内側斜面の下端表土中から、土師器皿（32）と簪状の不明鉄製品（33）が出土した。土壘上及び斜側面とその付近には、近世末～近代にあたる骨壺や陶片・骨片が散在していた。

②土壘外側（南西側）平坦面 【9～12T】（第11図）

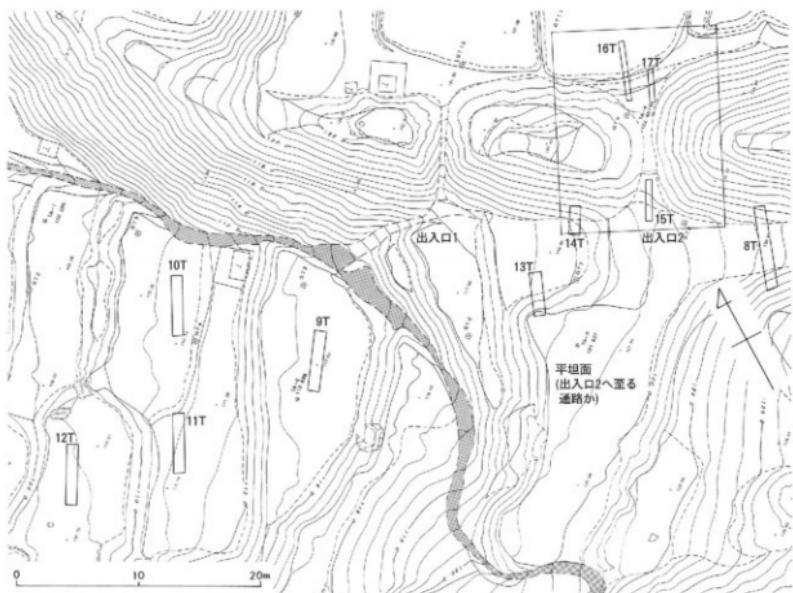
どのトレンチからも遺構が確認できなかったため、層位図のみ記録作業を行った。しかし紙数の都合で層位図の掲載は割愛した。この地区の基本土層としては、1層：表土（黒褐色粘質土）が約5～10cm、2層：暗褐色粘質土が10～15cm、その下に3層：褐色粘質土が20～40cmの厚さで堆積しており、地山はさらに下層となる。中世土師器皿が2、3層より出土しており、遺物包含層と考えられるが、遺構面などは確認できなかった。遺物はどのトレンチからも土師器皿の小片が僅かに見られた。11Tが最も多く出土し、15世紀後半～16世紀代の土師器皿（63～66のうち、66は16世紀後半）と鉄釘1点（67）が出土した。遺構は確認できなかったが、室町期になんらかの構築物と人々の活動があったことは推察できる。69は遺跡内で表探した底部を窪ませた上器皿である。出土遺物の中に近現代の遺物ではなく、現在確認できる階段状の平坦面は、土師器皿の主体時期である15世紀後半に造成された可能性が高い。

③土壘出入口と空堀状遺構 【8、13～17T】（第5～9、11図）

土壘出入口として、現在2箇所確認できる（第6図参照）。出入口（1）は堀切のように土壘をV字状に断ち割る形状で、上端の幅4.5m、下端（通路部分）の幅は0.5mを測る。外側の通路から内側（北側）平坦面へ至る道は、幅が狭く、勾配の急な坂を登るものである。内側平坦面と通路部分のレ



第5図 各トレンチの層位図・平面図 ($S = 1/50$)



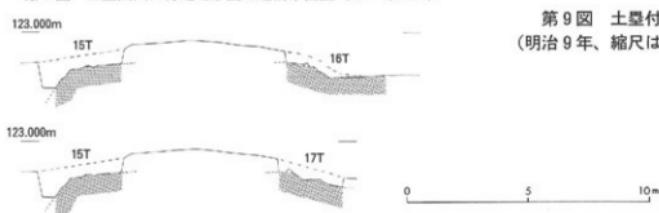
第6図 土壘付近地形図 ($S = 1/400$)



第7図 土壘出入口付近地形図と造構平面図 ($S = 1/200$)



第9図 土壘付近地籍図
(明治9年、縮尺は約600分の1)



第8図 土壘出入口部分エレベーション図 ($S = 1/200$)

ベル差はない。一方出入口（2）は出入口（1）より奥まった場所にあるが、上端幅約7m、下端幅1mを測る比較的広いものである。出入口（2）は内側平坦面とのレベル差が約50cm高まっていることから、その通路部分に相当量の盛土が成されていることが想定された。そこで、その堆積状況と出入口部分の形状を確認するために15~17トレンチを設定した。さらに土壘外側（南西側）の谷状に窪んだ地形が、空堀の可能性が考えられることから、堆積状況や形状を確認するために8、13、14トレンチを設定した。

層位 土壘出入口（2）付近の層序は、表土（黒褐色粘質土）の下に、2. 明褐色粘質土層、3. 黄褐色粘質土層、4. 茶褐色粘質土層、5. 黄褐色粘質土層が階段状に成形された地山上に堆積していることが確認できた。土壘外側に設定した他のトレンチの層位は、地点によって異なり各トレンチ間で対応する土層は、表上以下明確でない。各トレンチの埋土は、褐色系の粘質土と黄褐色粘質土が自然堆積した状況を呈する。14Tの②層、13Tの③層では水性堆積を示す土層も確認できた。

遺構 15~17Tにおいて、階段状の遺構と空堀状遺構を検出した。第5図の16、17Tにあるように、丘陵部地山を階段状に削り出し、通路部分となる頂部は平坦に成形している。通路部分は第8図のエレベーション図のように、15Tまで平坦面が続くものと考えられる。17Tでは、広いテラスを1面設けた、2段の踏み段が検出された。北側から2段目の縁を径20cmの大河原石で西側により1箇所はぞっている。16Tにおいては、2面のテラスと3段の踏み段を検出した。北から2面目のテラスと3段目の縁に径20cmの河原石を敷設していた。15Tでは通路部分の平坦面及びそこから続く堀状の落ち込みを検出した。第5図15Tの平面図に、掘り方とその続く部分をトーンで示している。なお13Tで検出した掘り方も同様にトーンをかけている。空堀状遺構の堆積状況を見ると、人為的に埋めたものではなく自然堆積によるものと考えられる。なお埋土からは、15世紀後半～16世紀初頭にあたる土師器皿（62）が1点出土した。

15Tで検出した空堀状遺構の掘り方を確認するために8、13、14Tを設定したが、8、14Tにおいては土壘際まで掘削したが地山の方が確認できず、崩落の危険性があったため検出していない。8Tは褐色系粘質土の堆積が主で、⑤層、⑩層から多量の炭化物片とともに15世紀後半～16世紀初頭の所産と思われる土師器皿が出土した。14Tは褐色系と黄褐色粘質土が相互に堆積しており、⑦層から16世紀前半にあたる土師器皿（61）が出土した。13Tでは、15Tで検出した空堀状遺構の続きと思われる掘り方を検出できた。自然堆積と思われる褐色粘質土からは、遺物は出土していない。

遺物 8、14、15Tの埋土から、中世土師器皿が出土した。全て15世紀後半から16世紀前半までの所産時期にあたる。8Tでは、52、53が③層、54~60は⑩層から、14Tでは、⑦層から61、15Tからは層位不明の62がそれぞれ出土した。

IV. 調査のまとめ

今回の調査では、現在も良好に残る土壘と内側（北側）の平坦面を含む一帯の地形図作成に重点を置いた。さらに、遺構検出及び遺物による時代の特定を目的とした試掘調査では、建物などの遺構は確認できなかったが、遺物包含層の確認や、出土遺物によって遺跡の年代が、15世紀後半～16世紀代までとの特定ができたことは大きな成果といえよう。

本遺跡は当初より、居館跡もしくは寺院跡と推定されていたが、その存在を裏付ける遺構は確認できなかった。しかし、土師器皿など中世期の遺物が定量出土し、その種類は破片数で土師器皿271点、珠洲焼（壺・甕）2点、青磁碗1点、越前焼甕1点である。そのうち土師器皿は、中世期の全出土遺

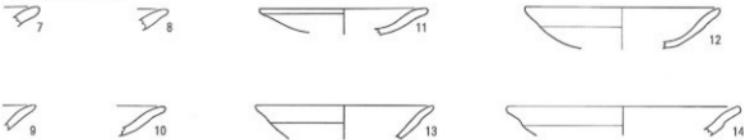
1 レンチ (1~3)



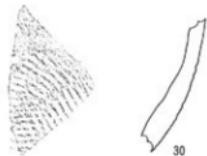
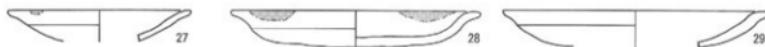
2 レンチ (4~6)



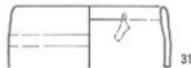
3 レンチ (7~20)



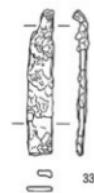
4 レンチ (21~30)



5 レンチ (31)



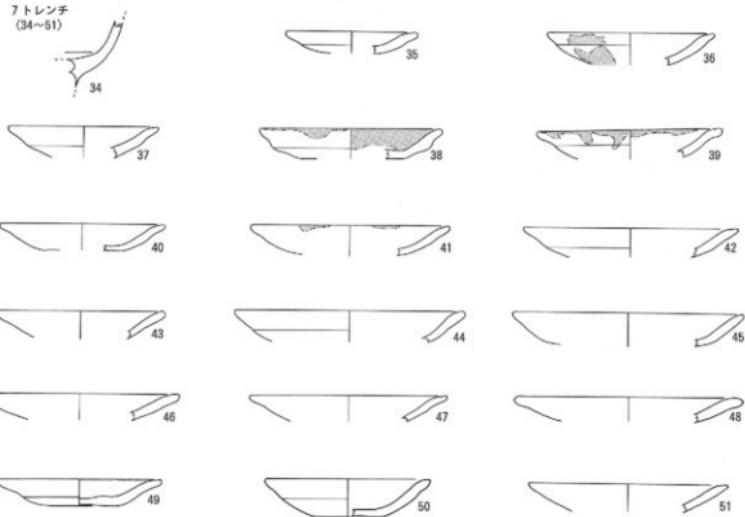
土壌表土 (32, 33)



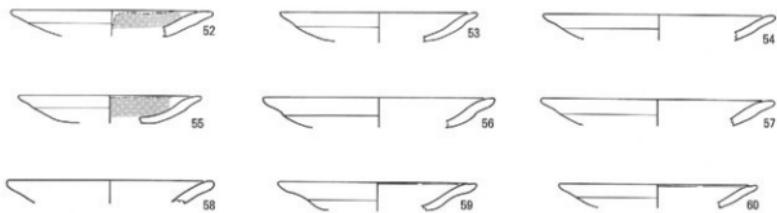
2 3 10 20 cm

第10図 出土遺物実測図① (S = 1/3)

7 トレンチ
(34~51)



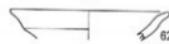
8 トレンチ (52~60)



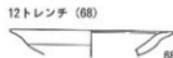
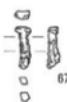
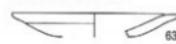
14 トレンチ (61)



15 トレンチ (62)



11 トレンチ (63~67)



第11図 出土遺物実測図② (S=1/3)

物破片数277点のうち、271点（うち灯明皿22点）であり、98%を占める。ちなみに内側平坦面の出土総破片数238点のうち土師器皿は233点（98%）、外側平坦面の総破片数21点のうち土師器皿が20点（95%）、空堀状遺構の埋土は全て土師器皿で18点となっている。土師器皿の出土が多い点では、一般集落とは異なる城館遺跡特有の組成ともいえるだろうが、出土遺物がほぼ土師器皿で占められるといった組成は特異な状況といわざるを得ない。この組成は通常の生活活動を示すものとは考えられず、本遺跡使用時の「特殊性」が想定できる。平成13年度に調査した三枚田地区の調査では、出土遺物の組成から城館・寺院跡と想定される。三枚田地区とホーエン遺跡との関連性は立地的にも強いものと考えられ、「日常」の生活活動の場である三枚田地区、「非日常」である、祭祀的な空間のホーエン遺跡といった関係が推察できる。

現地は陣場整備の影響は受けていないが、戦前まで水田として使用されていたこともあり、土地の削平が懸念されていた。しかし遺物包含層が確認できなかった地点は、遺跡北西側の範囲であり、このことは、地形の改変が差ほど行われておらず、現況が中世期の状況と似ていたことを示すものとも考えられる。3・7Tにおいて、多量の炭化物や礫群、中世遺物が集中して出土したことから、遺跡の中心部分と推定できる。のことから、平坦面中央部の一段高まった方形部分に中心的な建物があった可能性は高い。そのことで、地形図に見られる水田のあぜの不自然な形状も納得できる。

土塁出入口（2）の調査では、土塁内側の地山を階段状に、頂部の通路部分は平坦に成形していることが確認できた。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、戦国期の遺構と見てよいだろう。出入口（2）の前に土塁が存在するが、出入りに際し、上橋もしくは木橋が必要であるが、今回の調査ではその点を解明し得る箇所を調査していないため、今後の課題とした。

出入口（2）が本来の山入口と推定するもうひとつの根拠として、第9図にある明治初期の地籍図がある。ここにトーンを貼った部分である道筋が記されており、旧道（中世期の道）がこのルートであるならば、土塁外側に存在した空堀状遺構を迂回する形で、出入口（2）の正面に広がる平坦面を通て内側平坦面の建物へ至る、といった道程が想定される。

空堀状遺構の調査では、15～16世紀には堀としての機能をもっていたことは確認できたが、人為的な掘り込みなのか自然地形の谷を利用していたのか、またどの範囲まで掘り込みが存在していたのかといった事は、トレチの設置数や完掘していないこともあり、決め手に欠いた点は否めない。このことは次年度調査の検討課題となる。

次年度は、城壁群を構成する山城のひとつ升方城跡の地形測量調査と、城下町鹿熊地内にある、皆状の遺跡と推測される地点の試掘調査を行う予定である。また、今年度実施したホーエン遺跡の調査で確認した空堀状遺構の確認、特定作業を行い、その形状や範囲を追加調査していくこととしたい。

引用・参考文献

- 魚津市史編纂委員会 1968 『魚津市史上巻』
" 1982 『魚津市史史料編』
魚津市教育センター 1982 『魚津の自然』
魚津市教育委員会 2002 『松倉城壁群発掘調査報告Ⅰ』
新人物往来社 1980 『日本城郭大系7』
高橋成計 1992 『越中松倉城壁群の考察』『越中の中世城郭第2号』富山の城を考える会
舟橋村教育委員会 2001 『富山県舟橋村仏生寺城跡発掘調査報告』
麻柄一志・塙田明弘 1999 『魚津市松倉城跡の試掘調査』『魚津市立博物館紀要第5号』魚津市教育委員会



土壘出入口(1) 内側平坦面より



土壘出入口(2) (内側平坦面から望む)



1 トレンチ発掘風景



土壘出入口(2) 内側平坦面より (16トレンチ)



土壘出入口(2) 内側平坦面より (17トレンチ)



2 トレンチ柱穴状ピット



土壘外側平坦面 10トレンチ発掘風景



空堀状遺構 8トレンチ発掘風景



8トレンチ掘削状況



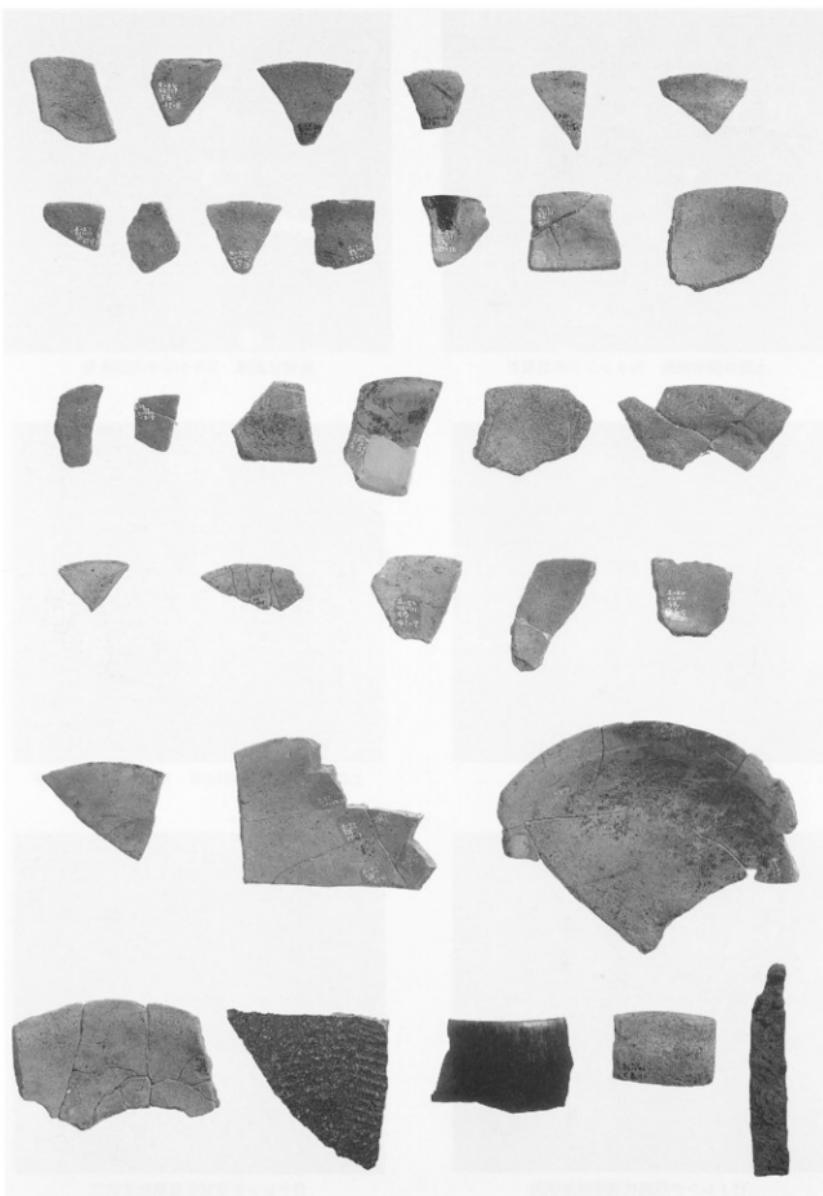
土壘出入口(2)外側より 15トレンチ掘削状況



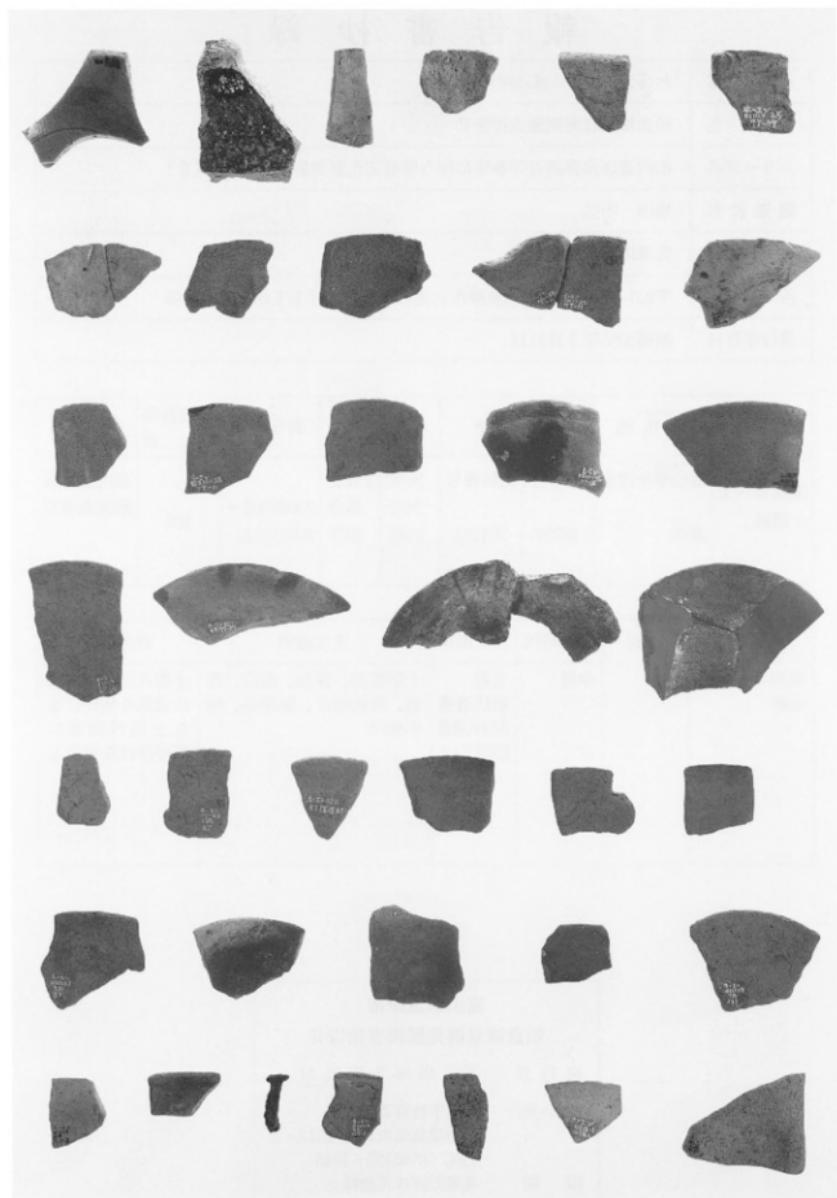
15トレンチ空堀状遺構検出状況



13トレンチ空堀状遺構検出状況



出土遺物(1) 1~5 トレンチ、土壘表土より出土 (1/2)



出土遺物(2) 7~12トレンチ出土 (1/2)

報告書抄録

ふりがな	まつやまこういんはくつちうしほぐ
書名	松倉城星群発掘調査報告Ⅱ
シリーズ名	市内遺跡発掘調査等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
編集者名	塩田 明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	〒937-0066 富山県魚津市北鬼江313-2 TEL 0765-23-1045
発行年月日	西暦2003年3月31日

所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
鹿熊ホーエン遺跡	富山県魚津市 市町村 鹿熊	遺跡番号 16204 204081	36度 26分 05秒	137度 45分 20秒	20020902～ 20021218	100	市内遺跡発掘調査事業

所収遺跡名	主別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿熊ホーエン遺跡	城館	中世	土塁 堀状遺構 階段状遺構 柱穴状ピット	土師器皿、珠洲、越前、青磁、炭化物片、鉄製品、越中窓戸	土塁入口部の階段状遺構を検出。また土塁外側部に堀の存在を確認した。

富山県魚津市 松倉城星群発掘調査報告Ⅱ

発行日 平成15年3月31日

編集・発行 魚津市教育委員会
富山県魚津市北鬼江313-2

TEL (0765)23-1045

印刷 共栄印刷株式会社

